

上總海保元備製文 備後小島知足(小嶋尚口(糸+同から一を

去る、春澳)書し并せて篆額す

嗚呼、其の名を問へば則ち醫也、其の攷古、博渉の力を問へば則ち吾が儒(學問、猶ほ愧あるがごとし。これに宜きは、尋常醫流の之を目するを以てすべきか、吾が兀なるを以てすべきか。親しく交れるは、

維れ弘前の澁江道純、其れ之に似たり。道純、少くして學を市野迷庵に受け、長ずるに迨び復た狩谷椽齋に従ひて遊ぶ。蓋し近今の古

學を論ずる者は、二堊(老、二老は老子と莊子か)を必推(無理に推賞する、こ

じつける)すれど、道純、晨夕にその中を浸灌し、その學具わるが故に

端緒を有す。遂に推して以て醫方を切劘したり。宜しきかな、その

立論の大いなる。世醫と與に經庭を■(欠損して未詳だが「行」とも読める

みづから)かむか、世醫、醫事は自に心得有りと謂ひて書に關わるを非る。乃

ち或は讀書して之を求むること輒近(このごろ)にして足るも、古人の

既に注せる迹の奇なるに追るを用いざりし。道純乃ち謂う、鑿の妙

は必ず自ら讀書中に處し得來得・來ともに強い肯定の氣持ちを表す助詞。亦

た必ず自ら古書中にあり得來。素問の陰陽結斜の斜字の如き、前人、

其の解に難ずるも、道純は謂ふ、斜は當に斜字の訛りなるべし。説文「糾瓜瓠結り」を引き證と爲して云ふ、「結斜」は即ち「結り」、

其れ七損八益に玉房秘訣を引きて謂ふ、其の言と王注と付洵して古來相傳の説を爲す。靈樞の「精ならざれば則ち人に正當ならず」(靈樞・

本神第八)の言も亦た人に異なれり。道純、「正當」は連文なりと謂ひ

て、華佗の爲せる證を援く※1。識者、其の明確なるに服すべし。其

の醫方の傳は、之を伊澤蘭軒に得、復た治痘の訣は池田京水より受

く。然るに亦た、未だ敢へて人のために治を施すを輕んぜず。毎に

古善本を徵せよ、古醫經を校せよと謂ひ、以て古醫道を味わうを吾

事として畢せり。何ぞ必して(自説を枉げない)屑屑し、世醫と争ふこと

長き乎。故友丹波君菑庭、嘗て迷庵掖齋の没すること廿(三十年)にして、

能く古本を鑒別せる者は唯だ道純及び森立之にして罕しと歎く。

獨り能くその真傳の相を得、與に謀りて其の經籍訪古志を撰ばせ使

む。余、亦た皆て之に序を爲せる間に寓目せるは、例へば學者の

傳錄稱を少と爲すべからざるの種なり。意へば道純の力居、多なり

き。家に多く古本を儲け一つとして精善ならざる莫く、藏せる所の

各書、一つとして點校を経ざるは莫し。學者にして考古を欲する者、

必ず借觀(借鑑・他人の言動を自己の戒めとする)して正しきを取るべし。性

は沉默寡言にして、遂に見えざるが如きを視るべし。長じて迨<sup>およ</sup>べる所、其の人と爲り、辨證分析して証明する所有りて各々其の益を獲るべし。其の精に博を服し始めたるは弘化甲辰（一八四四年躋壽館講師となると云う。

官命ありて暨經を躋壽館に講じ、歳に（歳ごとに）賞賜有り。嘉永巳酉（一八四九年三月將軍に謁見）に奉じ始む。

朝見既に又た例なりて廩米を賜る。凡そ館中分校（手分けして校正する）との各書、必ず道純を経て再勘し、然る後、定めと爲す。著す所は素問識小、靈樞講義、及び雜錄若干卷有り、皆家に藏す。道純、諱は全善、抽齋と號す、道純は其の字也。『祖日本皓考』に曰く、九成

の世、弘前の侍醫と爲る。妣<sup>はは</sup>（死んだ母親）は岩田氏（岩田縫）。其の生れて在るは文化乙丑（文化二年、一八〇五年）十一月八日、以て安政戊午（安政五年、一八五八年）八月廿九日病歿す。年五十有四を得、江戸谷中感應寺に葬らる。三子有りて、長は恒善、尾島氏出（出身の妻、尾島定先<sup>つねさき</sup>）、次は

優善、岡西氏出（なにかし、岡西徳）、後に矢島氏と爲る、三は成善、山内氏出（山内五百）、一女ありて平野氏出。三子皆な余に託され學を受く。越に己未、將に石墓を勒<sup>は</sup>らんとし、道<sup>の</sup>ぶるに余に文を

属<sup>じゆ</sup>す。嗚呼、吾が親交する所、小島寶素君、丹波菑庭、暁湖の二君、及んで掘川舟庵の如き、數年の間に皆な相繼いで道山に歸る。今復

た道純の奄歿に遇ひ、筆を執り以て墓石に志さんとす。能く既焉(慨  
焉・なげく三歎せざらん乎、遂に其の生平平生、一生を節録(要点のみの記  
録)し併せて銘と為す。銘じて曰く、

醫家を以て醫書を治め 儒者に與りて經を治めて一致す 維ぞ是れ

古は徴すに足る 何ぞ問はむ今人に、異有るやを 嗟矣平

斯の人しかりして亡く 此の理、其れ誰と與に議らむ

萬延紀元(一八六〇年)、歳次(年まわり、あるいは歳星=木星の次)、上章(火の  
やどり

兄の異名)涪灘(太歳が申にある年) 八月廿九日建) 廣羣鶴刻字す